

碑碣の源流とその伝播

藤井直正

一 はしがき

全国どこの地方に出かけても、神社の境内や公園の一隅、あるいは町角で見かける石碑、数行ないし十数行に及ぶ漢字が刻まれ、現代に生きる私たちに何かを語りたげに立っている石碑。

時代のうつりかわりとともに、ともすれば忘れがちではあるが、そこに刻まれている碑文には、過去のできごとや、世のために尽くした人びとの業績が記されている。漢字に親しみのうすい若い人たちにとっては、折角の碑文も、たとえ、それが有名な漢学者の撰文に成る名文であっても、外国語を読むのに等しいが、私たちの祖先のあしあとを、私たちの祖先が、文をつくり、筆をとって記された文章なのである。

元来、石碑は、あるできごとやその場所を記念し、あるいは顕彰し、人の功績をたたえるために建てられたもので、古文書や記録とならぶ重要な史料であり、記念物であることはいままでもない。

これは昭和四十三年、私が東大阪市史編さん室に嘱託として寄寓していた時、東大阪市内に所在する石碑を自ら調査し、編集した『東大阪市の石碑』（『東大阪市史資料』として昭和四十四年三月発刊）の「はしがき」に記した文章の一部である。

この中で、数ある石碑を、Ⅰ記念碑、Ⅱ頌徳碑、Ⅲ顕彰碑、Ⅳ供養碑、Ⅴ忠魂碑、Ⅵ歌碑・句碑に分類した。この他に墓地や寺院の境内に所在する多数の墓碑があるが、これは別に収録することとして割愛した。この分類は一般向の刊行物であるため、わかりやすくしたまでのことで

碑碣の源流とその伝播

明確なものではない。

それにしても、現在のわが国で「碑」とよばれているものは多種多様である。しかし、形はさまざまに変化していても、あるできごとを記念し、そのできごとにかかわった者の功績を後世にのこすために、「碑を建てる」という習俗・習慣が、いかに根強いものであるかということを実感するのである。

私が「碑」に関心を持ったのは、この仕事に携わった時以来である。「碑」というものが、いつごろ、どこで、どういうことから始まったのか、どのようなつりかわりがあったのか、といったことについて、系統的に資料を集め、これをまとめて見たいと思いついた。

今年の三月、有志の学生諸君と共に、はじめて中国を訪れる機会にめぐまれた。中国のさまざまな文物を自分の眼でたしかめたいというのがその目標であったが、その一つとしてできるだけ多くの碑を見ることを心がけた。とくに西安には著名な「西安碑林」があり、これを参観地の中に加えたし、大雁塔にある褚遂良の筆に成る「大唐三藏聖教序」と「大唐三藏聖教序記」の二碑も見たいものの一つであった。

さすがに中国は文字の国である。どこへ行っても至るところに碑のあるのには驚いた。北京の故宮や頤和園はもとより、浄土宗発祥の寺院として著名な太原の玄中寺では「弥勒頌」という篆額のある唐代の立派な碑を見た。ところが、期待と抱負をもって訪れた西安碑林では、あまりの数に圧倒されて茫然と立ち尽くす始末であった。とても限られた時間の中で見学できるものではないのである。しかし、帰国後間もない四月一日から二十日まで、大阪市立美術館で「西安古代金石拓本と壁画展」が開かれ、西安で見た著名な碑の拓本に接することができたのは好運であった。

碑のはじまりが中国であり、他の文物と同じように朝鮮半島を経由してわが国に伝えられたことは記すまでもないが、考古学の世界では意外に関心が薄く、これを対象とした研究が少ないように思うのは私の寡聞のせいであろうか。数ある概説書の中でも碑を扱ったのは『新版考古学講座⁽¹⁾』だけであり、単行本としては、故藪田嘉一郎氏の『石刻⁽²⁾』があるにすぎない。ところが、碑の歴史や変遷については、碑に刻まれている文字が書道の対象となることから、書道関係の書物に、これらの概説や論考が載せられており、また中国の主要な碑、日本の古碑の写真や碑文の拓本が掲載されている。さらに、名碑については碑帖が刊行されていて手近かに見ることができると知った。

しかし、別の観点から見ると、碑というよりも、碑の文字が書道・金石文としての立場から、現代でいうと書道芸術あるいは書道技術の立場

からその対象とされているが、考古学の立場から碑を対象とした研究は数少ない。すなわち碑の起源、形態、変遷過程等を型式学的方法によって編年する試みや、他の遺跡・遺物との比較を通じて文化史的に考察するといった研究はまだ十分に行なわれていないのである。

大陸文化が陸続として伝えられたわが国にも、その影響を受けて、奈良・平安時代に造立された古碑が数多くはないが存在している。そのことは、文献の上からも、また現実には伝えられている遺例によっても知ることができるのであり、水戸光圀による那須国造碑の顕彰をはじめ、多賀城碑が歌枕として知られた「壺の碑」^(いしづる)として、松尾芭蕉が『奥の細道』に書きのこしたことなど、古碑をめぐる話題は江戸時代以来いくつかの事例を挙げることができる。また狩谷棧斎は『古京遺文』を著わしたが、その中に碑をとり上げ、その他の古碑についても各々地方の学者がそれぞれの立場から考証を加えているが、故川勝政太郎先生が指摘されたように、中国清代におこった考証学の影響によって、碑は、まず金石学の対象として金石学者が取上げたという研究史を物語っている⁽⁴⁾のである。これを考古学の立場から取上げたものとしては、前記の福山・薮田両氏の概説のほか、多胡碑をはじめとするいわゆる上野三碑を、古墳研究との関連から考察された故尾崎喜左雄博士の一連の論考⁽⁵⁾、および那須国造碑についての斎藤忠博士の論考⁽⁶⁾、さらに元明天皇陵碑を古書の記載を通して細かく追跡された福山敏男博士の論考⁽⁷⁾等がある。

以上の経過から、私自身としては、碑の起源と変遷についての資料を集めると同時に、日本の古碑をできるだけ実見しようと志し、東北・関東・九州に足をのばして来た。本稿は論文といえるものではないが、ここ数カ月の間、これらの資料を通じて気づいたこと、考え及んだこと、そして実際に碑を現地で見えて感じたこと等を摘記し、大方のご叱正を得るために書き綴って見た覚書である。

註

- (1) 伊藤道治氏「中国」(『新版考古学講座』2、通論下、金石学的研究所収、昭和四十四年)、および福山敏男氏「古碑」(『新版考古学講座』7、有史文化下、石造物所収、昭和四十五年)
- (2) 中国の金石学者馬衡原著の『石刻』の翻譯を基本とし、薮田氏の筆に成る「古碑とその変遷」「日本上代の墓誌」「問題のある我が上代金石文」の三つの論考が収録されている。本書については後に紹介する。
- (3) 故水野清一博士「碑碣の形式」(『書道全集』二、中国2漢所収、昭和四十五年)、外山軍治氏「唐の太宗と昭陵の碑」、長廣敏雄氏「隋唐の碑碣」(『書道全集』七、中国7隋唐1所収、昭和四十六年)等。
- (4) 故川勝政太郎博士「金石」(『日本古文書学講座』1総論編所収、昭和五十三年)
- (5) 故尾崎喜左雄博士「多胡碑」(昭和四十二年)および「横穴式古墳の研究」(昭和四十一年)

碑碣の源流とその伝播

- (6) 斎藤 忠博士『日本考古学史資料集成』（昭和五十四年）および『年表でみる日本の発掘・発見史①奈良時代～大正篇』（昭和五十五年）
(7) 福山敏男博士『元明天皇陵碑』（『史迹と美術』第四一七号、昭和四十六年）

二 碑 碣 の 語 義

碑碣の語義ないし源流をさぐるに当たって、手近かなところからと思い立って、『詳解漢和大辭典』をひもといて見た。それには次のように記されている。

まず「碑」については、

①たちいし。古代宗廟の門内に立てて犠牲を繋いだ柱状の石。〔禮記祭義〕君牽牲既入（碑）廟門（碑）麗於（碑）。

②古代貴人の棺を穴に葬むる時、其棺をつるす繩をしばった石。

③いしづみ。後世に傳へるべき事がらを彫刻して樹てた石。（おもに形の四角なものを、圓いのを碣といふ。）

とあり、三つの語義が示されている。すなわち、①②は碑の起源を説明するものであり、③はそれから発展した一般的な意味である。そして、形の四角のものを「碑」、圓いのものを「碣」とよんだことがわかる。さらに熟語として、

〔碑碣〕いしづみ。石碑。（碣は圓形の碑。）

とある。そこで「碣」の方を見ると、

いしづみ。後世に傳へるべき事がらを彫刻して樹てた石。（形の四角なのを碑、圓いのを（碣）といふ。）

と記されている。碑と碣との語義については堂々めぐりの感じであるが、「碑」と「碣」は同義語であって、形のちがいだけということになる。諸橋轍次博士の『大漢和辭典』を見ると、原典が引用されているなど、さすがにくわしい。「碑」については、

①たていし。〔説文〕碑、豎石也、从石卑聲。②角な形のたていし。〔後漢書、竇憲傳、封神丘二兮建隆碣一、注〕方者謂之碑、員者謂之碣一、嶋亦碣也。③古、諸侯・士大夫の家、又庠序の中庭に立てて日景を測った石。〔儀禮、聘禮〕東西北上、上當碑。〔注〕宮必有

碑、所以識日景、引陰陽也、其材、宮廟以石。④廟門の内に建てて、いけにへをつなぐ石。〔禮、祭義〕既入廟門、麗于碑。

〔疏〕麗、繫也、君牽牲入廟門、繫著中庭碑也、王肅云、以編貫碑中。

③ たてぎ。古、貴人の棺槨を墓穴に下す時に四方に立て、輓轡仕掛で棺を下すやうにした石又は木。〔禮、檀弓下〕公室視豐碑、三家視桓楹。〔注〕豐碑、斲大木為之、形如石碑、於槨前後四角樹之、穿中於間為鹿盧、下棺以綵繞、天子六綵四碑、云々、諸侯四綵二碑、云々、大夫二綵二碑、士二綵無碑。〔琅琊代辭編、碑誌〕古碑皆有圓孔、碑者悲也、初葬穿繩於孔以下棺、乃古懸定之禮、禮曰、公室視豐碑、今德政碑、亦設圓孔。

④ いしぶみ。①人の功徳を記して建てる石。〔釋名、釋典藝〕碑、被也、此本葬時所設也、施鹿盧以繩被其上引以下棺也、臣子追述君父之功美、以書其上、後人因焉、無故建於道陌之頭、顯見之處、名其文就、謂之碑。〔初學記〕碑、以悲往也、今宮室廟屋墓隧之碣、鐫文於石皆曰碑。⑤ いましめや、規則などを書いてたてる石。〔玉篇〕碑、臥石也。〔中華大字典〕碑、按清世祖欽定曉示生員文曰、臥碑、頒發各學、刊立明倫堂之左。〔傍線筆者〕

以上を要約すると、「碑」には、①たていしという語義があり、それは、

① 角な形のたていし（狭義の碑）

② 中国の古代に、諸侯や士大夫の家で庠序の中庭に立てて日景（影）を測った石。一日時計の役割？

③ 廟門の内に建てて、いけにえをつなぐ石

の三種類、さらに③として、たてぎの意味があり、これは、

古、貴人の棺槨を墓穴に下す時に四方に立て、輓轡仕掛で棺を下すやうにした石又は木。

と説明している。これらの解説は中国の原典にもとづくものであるが、①の④―⑤と③は碑の起源を考える上において基本となるもので、従来
の所見はすべてこれに帰結している。このことについては次節でくわしく考察したい。最後に③として、いしぶみの意味があり、

④ 人の功徳を記して建てる石

⑤ いましめや、規則などを書いてたてる石

として、後世になって本来の役割から転じ、発展して来た、今日的な意味での「碑」の語義を説明している。

碑碣の源流とその伝播

碑碣の源流とその伝播

なお『古事類苑』禮式部三十一、冢墓下には、墓制に関する史料が収録されているが、

〔字鏡集^二〕^ヒ碑^{シルス}
フタ

〔和爾雅^一〕^{イシブミ}地理^一 石碑

〔倭訓栞^{中編二}〕^伊いしづみ 碑をいふ、石文の義、壺碑の類也。

とし、〔文體明辨〕の墓碑文・墓碣文を引用している。

三 碑碣の起源

碑碣の起源については、先に記したように漢和辞典にその語義とともに解説されているが、これを金石学的見地から述べられたものとして、中国の金石学者として知られた故馬衡原氏の著作がある。その一つ「石刻」は『考古學報』第十冊（一九五五年十二月）に掲載されたものであるが、故薮田嘉一郎氏はこれを翻譯され、解説を付し、さらに「古碑とその変遷」「日本古代の墓誌」と題する論考二編を付して『石刻 金石文入門』として昭和五十一年に綜藝舎から刊行された。

この馬衡原氏は、一生涯を中国金石学の研究に捧げられた学者として内外ともに著名であり、多数の論文を発表されている。一九二三年（大正十三年）に北京大学の教授となり、合わせて研究所で中国金石学を教授された。一九三三年（昭和八年）には故宮博物院長に任じられたが、中日戦争のさ中に、その収蔵品の保存・管理に奔走されたということである。解放後も文物工作に専念されていたが、一九五五年（昭和三十年）北京で逝去された。

「石刻」は、『中国石文概説』の副題がつけられ、その内容は次の通りである。

序

- 一、周・秦 石鼓 秦刻石 陶文
- 二、漢・魏・晋 碑 磨崖 刻經 建築物附刻
- 三、南北朝 造像記 墓誌

四、隋・唐から明清まで 帖と叢帖

この中で、

碑という名称は古いが、文を刻し、形制にも一定の格式をつくり上げたのは東漢（後漢）の時である。以後一切の記事文字にしてつたわることのひさしきをのぞむものは、みな石碑を利用して刊刻した。この気風は現在にまで流伝している。碑は長方形の平べったい石片で、表と裏がある。前面は碑陽で、後面が碑陰である。上面には碑額がある。一に額といっている。下面に碑座がある。一に趺といっている。碑文は正面に刻み、姓名を陰・側〔面〕に刻む。大きいものは一、二丈の高さがあり、小さいものは僅かに二、三尺である。漢碑の額の下には往々一つの孔がある。魏晉以後にはあまり見られない。（裁田嘉一郎氏の訳文による）

と記し、大略のうつりかわりと、碑の形状を説明している。この論考には付図をのせ解説がつけられているが、それには「漢碑」の例一つと「好太王碑」がのせられている。

馬衡先生の著作・論考は多方面にわたるが、一九七七年（昭和四十二年）、中華書局出版から『凡將齋金石叢稿』が刊行されている。A5判、三八七ページの冊子である（第1図）。訪中の際、北京市琉璃廠の中國書店の棚で見つけて入手したのでここに紹介しておきたい。内容は次の通りである。

馬 衡 著

凡將齋金石叢稿

第1図 『凡將齋金石叢稿』の表紙

卷一 中國金石學概要

緒論

第一章 金石學之定義及其範圍

第二章 金石學與史學之關係敬

分論

第三章 歷代銅器

卷二 中國金石學概要下

第四章 歷代石刻

碑碣の源流とその伝播

碑碣の源流とその伝播

第五章 金石以外諸品

第六章 前人著録金石之書籍及其考證之得失^敬

結論

第七章 今後研究之方法^敬

第八章 材料處置之方法^敬

(以下略)

本書の中で、当面の碑碣についてのことは、第四章 歷代石刻のところに詳説されているが、引用して見る。

刻石之風流行於秦漢之世、而極盛於後漢。逮及魏晉、屢申刻石之禁、至南朝而不改。隋唐承北朝之餘風、事無巨細、多刻石以紀之。自是以後、又復大盛、於是石刻文字、幾徧中國矣。

石刻之種類名稱、僂指難數。有就形制言之者、有就文體言之者、有概名之曰碑者、錯綜糾紛、尤難分晰。今論其類別、一曰刻石與碑之別、二曰造像與畫像之別、三曰經典諸刻與紀事諸刻之別、四曰一切建築品附刻之文。其種類細目、即分系於各條之下而敘述之。

と述べ、つづいて、

一 刻石與碑之別

今人謂文之載於石者皆曰碑、其實不然。刻碑之興、當在漢季、古祇謂之刻石。秦始皇帝之議於海上也、其羣臣上議曰「古之帝者、……猶刻金石以自為紀。……今皇帝并一海內、……羣臣相與誦皇帝功德、刻於金石、以為表經。」故其東行郡縣諸刻、皆曰刻石、初未嘗謂之碑也。碑之名始於周代、為致用而設、非刻辭之具。記祭義、「君牽牲……既入廟門麗於碑」謂廟門之碑也。記檀弓、「公室視豐碑」謂墓所之碑也。廟門之碑用石、以麗牲、以測日景。墓所之碑用木、以引繩下棺（見儀禮聘禮注及記檀弓注）。其形式雖不可考、要之未必如今所謂碑也。刻文於碑、為漢以後之事、非所論於古刻、亦有所謂碑者、故古刻之真偽、不可以不辨。

と記され、そのあと遺例を挙げてさらにくわしく説明されている。

碣 史記秦始皇本紀言刻石頌德者凡七（鄒嶧山、秦山、琅耶、碣石、會稽各一刻、之罘二刻）、其文必先曰立石、後曰刻石、或曰刻所立石。所謂

立石者即碣、説文（石部）、「碣、特定之石」、是也。其形制今猶略可攷見。

これも同じように以下に遺例を挙げられている。

そのあと「磨崖」の説明がつづき、以下「碑」について、

碑 碑為廟門墓所用、既如上述。然則用以刻辭、果始自何時？曰、始於東漢之初、而盛於桓靈之際、觀宋以來之所著録者可知矣。漢碑之制、首多有穿、穿之外或有暈者、乃墓碑施鹿盧之遺制。其初蓋因墓所引棺之碑而利用之、以述德紀事於其上、其後相習成風、碑遂為刻辭而設。故最初之碑、有穿有暈。題額刻於穿上暈間、偏左偏右、各因其勢、不必正皆在正中。碑文則刻於額下、偏於碑右、不皆布滿。魏晉以後、穿暈漸廢、額必居中、文必布滿、皆其明證也。

碑之正面謂之陽、反面謂之陰、左右謂之側、首謂之額、座謂之趺。質樸者圭首而方趺、華美者螭首而龜趺、式至不一。と述べられているのである。

碑の起源については、二の語義において記し、ここでは馬衡原氏の所説を紹介したが、判然としない点がないでもない。

碑碣というものを生み出した中国においては、「碑」と「碣」との明確な区別があったに相違なく、それは形だけでなく起源の上からも、本来は用途が異っていたものと考えられる。碑は形の四角いもの、碣は円いものと截然と語義の上で分けられているのであるから、この区別の根源をたどって見たいのであるが、現在のところではそれを証明する手だてがないのである。中国においても、時代のうつりかわりと共に本来の意味が忘れられ、碑と碣との区別が明確でなくなるように思われるがどうか。

この碑なり碣なりを造立するという思想ないし文化のわが国への波及については次節においてくわしく論証するつもりであるが、それが伝えられた時から明確ではなかったように考えられるのである。

四 造碑の思想と碑形の推移

中国に遺存する古碑の実例によって碑碣の起源と碑形のうつりかわりを概説されたものとして、故水野清一博士の「碑碣の起源」がある。⁽¹⁾ 以下の本論はこれを参考にしながら書き進めたいと思う。

碑碣の源流とその伝播

まず碑碣の起源については、有名な秦の始皇帝の巡狩の刻石が、『説文解字』の碣の説明に「特立の石なり」とあることから碣とみなし、それに先立つ石鼓を碣のうちにふくめて、そのはじまりを戦国・秦の時代、碑のあらわれるのは後漢の時代であるとされている。

碑の起源は、いろいろの説があるが、要するに二つの系統があるとし、次のように記されている。

一は禮記の祭義にみえる宗廟の門内にある碑である。これは犠牲をつなぐためのもので、一種の柱である。石でつくったか、木でつくったかわからないが、紐をとほす孔があり、これが碑の穿になったという。

二は禮記の喪服大記にある碑で、墓にたてる柱である。これも石とも、木ともいわないが、二碑あり、それぞれ滑車をつけ、棺を擴底をおろすのにつかうという。のちの碑に圓首で暈のあるものがあり、それはこの滑車のなごりだという。暈は圓形の溝で、それが一方だけ相かさなっている。あたかも滑車をななめにみたような表現である。このばあいにも穿はみられるが、これは滑車の軸孔にあたるわけである。

先に見て来た辭書の語義にしても、馬衡原氏さらに水野博士の起源の解説にしても、碑碣そのものの原形については古典に記された説明にとどまり、またそれが出発点となっている。果たして、古典に記されたような用法なり習俗なりが、少くとも戦国・秦の時代以前あるいはその後にあったのであろうか。これを考古的に解明したいと思うのであるが、こうした点についての先学の論考は皆無なのである。

水野博士はつづいて「こういう廟門の碑、墓上の碑が石になり、文章が刻されると石碑になる」と記され、そのはじまりは後漢からであるとし、漢安二年（一四三）の「北海相景君碑」を掲げられている。それまで廟門の上に立てられ犠牲をつないでいた石また木、あるいは墓上にあって棺をおろすために立てられ、その機能を果たしていた石や木が、何故に木が石にかわり、文字が刻まれるようになったのかは記されていないのが残念である。それにしても、この大きな変革には、その原因となった習俗の変化、あるいは墳墓の造営ないし棺槨の埋置のし方に大きな変化のあったことも考えられ、これも新しい疑問であり課題にもなってくる。

北海相景君碑は、中国山東省濟寧にあり、景君とよばれる人物の墓碑で、碑陽（碑の正面のこと）には次の文章が記されている。現在知られている最古の碑であり、後代の碑文の基本になったものと考えられ、碑文の形式を知る上に重要であるから、煩をいとわず碑文を記して見たい（『二玄社刊『書道名品叢刊』69を参照）。

なお、この碑は上部が山形になった圭首で、その下中央に孔（いわゆる穿）のあけられていることに注意しなければならない（第2図）。

誄

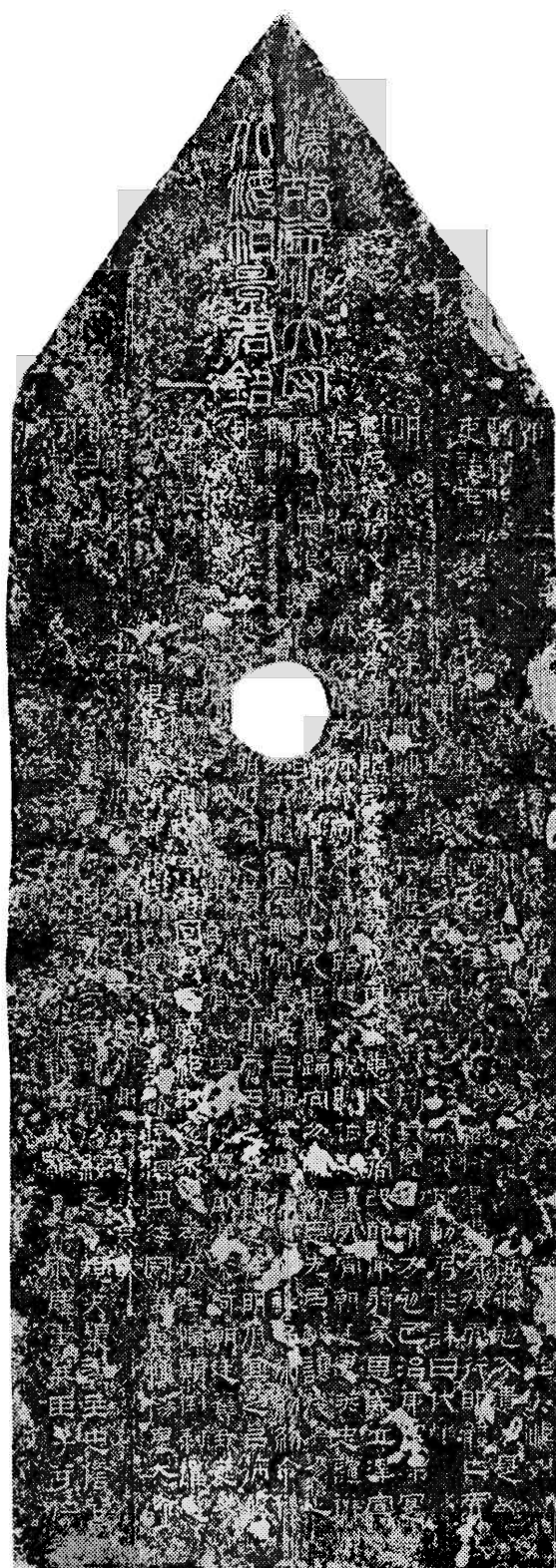
惟漢安二年。仲秋□□。故北海相・任城・景府君卒。歎歎哀哉。國□□寶。英彥失疇。刻宿虧精。晚學後時。于何穹倉。布命授期。有生有死。天寔爲之。豈夫仁哲。攸翹不遺。於是故吏諸生。相與論曰。上世群后。莫不流光。輝於無窮。垂芳耀於書篇。身歿而行明。體亡而名存。或者形像於列圖。或繫頌於管弦。後來詠其烈。竹帛叙其勳。乃作誄曰。伏惟明府。受質自天。孝弟淵懿。帥禮蹈仁。根道核藝。抱淑守眞。皁白清方。翹已治身。寔深寔剛。乃武乃文。遵考孝謁。假階司農。流德元城。興利惠民。強衛改節。微弱蒙恩。咸立澤宣。化行如神。帝嘉厥功。授以符命。守郡益州。路遐攀親。躬伯遜讓。夙宵朝廷。建策忠讜。辨秩東衙。暨追嘉錫。據北海相。部城十九。鄰邦歸向。分好惡。先以敬讓。殘偽易心。輕點踰竟。鳴臬不鳴。分子還養。元々鰥寡。蒙祐以寧。蓄道脩德。社以榮。紛紛令儀。明府體之。仁義道術。明府膺之。黃・朱・邵父。明府三之。台輔之任。明府宜之。以病被徵。委位致仕。民思慕。遠近搔首。農夫釋耒。商人空廛。隨興飲淚。奈何朝廷。奪我慈父。去官未旬。病乃困危。珪璧之質。臨卒不回。歎歎質絕。奄忽不圖。孝子悽慘。顛倒剝摧。遂不克寤。永圖長歸。州里鄉黨。隕涕奔哀。故吏切怛。歎歎低徊。四海冠蓋。驚慟傷懷。大命圖期。寔惟天授。明王設位。明府不就。臣子欲養。明府弗留。歎歎哀哉。

辭

辭曰。考積幽。表至貞兮。賢□□。翔議郎兮。再命虎將。綏元々兮。規策渠謨。主忠信兮。羽衛藩屏。撫萬民兮。恩彌盛兮。宜參鼎輔。堅幹楨兮。不永隳壽。棄臣子兮。仁敷海代。著甘棠兮。刊石勒銘。□不亡兮。

以上であるが、上方三角形の部分に「漢故益州大守北海相景君銘」の十二文字を二行に割って記しているが、これが題額で、文字は書体でいえば篆書で書くのがふつうである。その下に、一行三十七字、全部で十六行にわたって碑面一ぱいに文章が刻まれている。書体は隸書である。この碑文を見ると、「惟漢安二年……」ではじまる文章は、益州の大守であり北海相であった景府君の生前の業績が克明に述べられているのであって、墓前で行なわれる儀式に述べられる誄（しのびごと）を文章化したものと見られる。最後から三行目には「辭曰……」として、八十二字

碑碣の源流とその伝播



第2図 北海相景君碑

が刻まれているが、辭という文字には“いとまごい”“別れを告げる”という意味があるから、碑に記す「辭曰」という慣用句にはそうした意味が付加されているのであろう。

碑陰（碑の背面を碑陰という）には、五十四人の題名を記し、碑を建てる趣旨をもって結びとしている。

碑の原形はこうした圭首または圓首に求められるが、圭首のなごりが、後代の碑になるといわゆる篆額としてのこったのである。この時期では、圓首のものには暈のあるのが通例であるが、暈のすじが龍身に見立てられて龍頭となり、これが後代の螭首ちしゅの原形となる。その例としてあげられているのが、建安七年（二〇二）の「巴郡太守樊敏碑」である。

このように碑は、墓碑ということばで示されるように墓上に建てて、墓に葬られた死者の生前の業績をしのび称え、後世に伝えるのがその本来のすがたであったが、この風習は碑を建てることに華美を競うという悪弊を生み出すことになった。このため漢末から魏晉にかけては墓碑を

建てることを制限する禁令が出されたが、その結果、墓碑は小さくなって墓中に立てるようになり、またこれにかわって墓誌というものが新たに生み出されたことに注目しなければならない。しかしこれは墓碑に限ったことであって、別の目的での造碑、たとえば修造碑、記念碑等が逆に盛行することになったのである。

ところで、この碑の形は、第2図に示したように上方が三角に尖った山形をなしているが、こうした形のものを圭首けいしゅとよんでいる。その下の中央に円形の孔があげられているが、これが穿で、起源のところで触れたことにつながっており、そのなごりと考えられているものである。これに対して、自然石のものをふくめて、碑の上方の円いものを圓首えんしゅといい、これにも穿のあるものがある。

水野博士の説明にかえると、

後漢も、二世紀後半になると、建碑もさかんになり、碑形も一定する。すなわち、圭首か、圓首で、穿があり、板状をなす。正面は「碑陽」いい、と裏面は「碑陰」という。側面は「碑側」である。往々、上部に題額をつくり、これを篆書でかいたから「篆額」の名ができた。

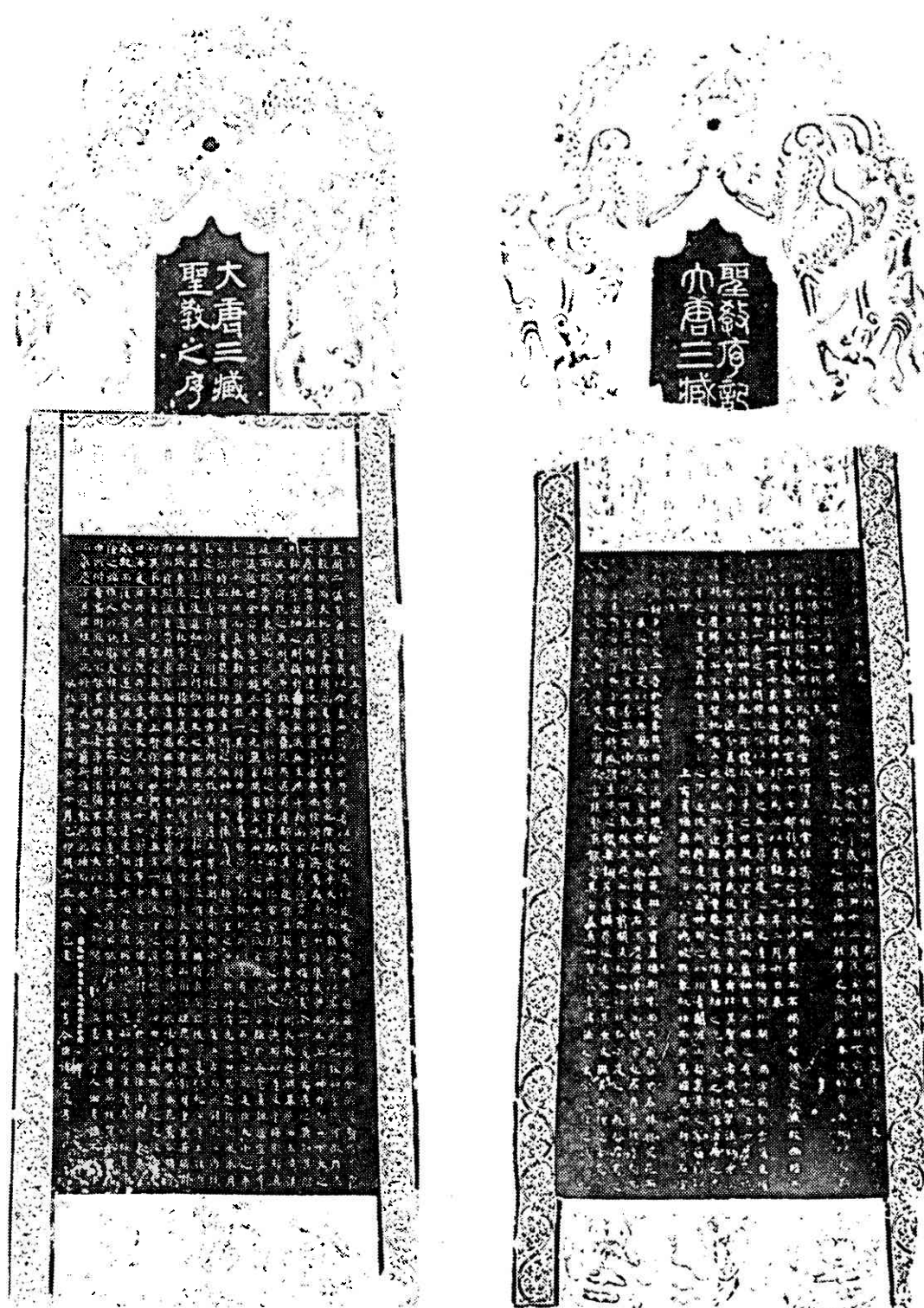
と述べられている。

南北朝時代にも造碑はやはりさかんで、とくに北朝では禁令がきびしくなかったためにかえって盛行した。

ここで碑の台座を見ると、当初は台はなかったのであるが、すでに後漢代の碑に方形の台、すなわち方趺ほうふたがあらわれ、のちに盛行する、亀の背に立てる亀趺かみふたは南北朝時代にはじまっている。こうして隋唐代には碑の形は定型し、上部に仏龕をつくったり、碑陽の左右や碑側に唐草文を配した華麗な碑がつくられるようになった。その一例として、西安で実見した、大雁塔の初層の龕内におさめられている永徽三年（六五三）の「大唐三藏聖教序碑」と「大唐三藏聖教序記碑」⁽³⁾を図版として掲げておく（第3図）。

以上、水野博士の概説を骨子として、中国の碑のうつりかわりを大まかにたどって来たが、大陸におけるこうした造碑の風習は、朝鮮半島を経てわが国にも伝えられることとなった。ここで朝鮮半島、とくに三国時代から統一新羅時代にかけての碑碣のあり方をとり上げたいのであるが、資料が十分でないことや紙数の制限もあるので必要に応じて参考することとし、他日を期したい。

さて、日本での碑のあり方はどうなのだろう。従来、中国の碑との関連で注意されて来たものとして、大阪府柏原市国分に所在する松岳山古墳まつたけやまこふみの事例がある。大和川を俯瞰する丘陵上に構築された前方後円墳で古墳と同一の丘陵からは、江戸時代に「船氏王後墓誌」⁽⁴⁾の発見されたこと



第3図 大唐三藏聖教之序碑(左) 大唐三藏聖教序記之碑(右)
(『西安古代金石拓本と壁画展』図録による)

で有名である。この古墳の主体部は、昭和二九・三〇の両年、小林行雄博士によって調査が行なわれ、長持形石棺をおさめた特殊な構造の堅穴式石室であることが明らかになったが、この石室の南と北に各一枚づつの孔のあいた石が立てられているのである（第5図）。

この二枚の立石は、古くから学者の関心を惹き、すでに江戸時代に藤 貞幹が『好古日録』に図示し、これについての見解を記している（第4図）。近代に入ってからでは、まず喜田貞吉博士⁽⁷⁾、つづいて梅原末治博士の論考があり、小林行雄博士も報告書で見解を述べられ、さらに斎藤忠博士の論文もある⁽⁹⁾。

要するにこの二枚の石が石棺の外側に相対して立てられていること、各々に小孔があげられていることから、これを中国の古典に見える棺をおろすための石、すなわち碑の原形と見るかどうかについての所見なのである。

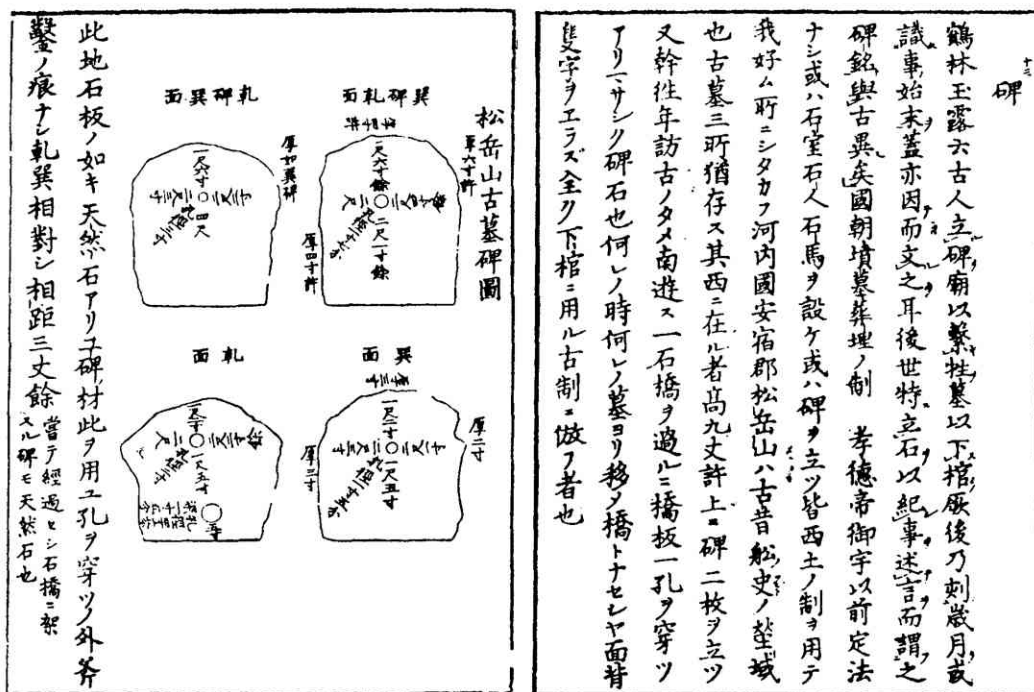
ここでくわしく所説を紹介するいとまがないので諸先生方の論考にゆずりたいが、私としては、斎藤博士の所見を一步進め、これが棺を下ろすための設備云々は別として、中国の古典に見える碑の原形をたどって、こうした石を立てること自体に、一つの意味を見出したのである。

そうした意味で、さらに時代をさかのぼって、墳丘の上に立石を設けた事例として、最近岡山大学の近藤義郎教授の発掘調査によって一躍有名になった岡山県倉敷市に所在する榑築遺跡がある。

倉敷市の北部につらなる丘陵上に「亀石」とよばれ、それをご神体とする小祠がまつられ、そのまわりに自然石が立ち並んでいるという遺構で、そのまわりから特殊器台の破片されたことが発掘の端緒であったということであるが、驚くべきさまざまのことが明らかになったのである。三世紀末の墳丘墓とでもいうべきものであるが、その内容はこのほど刊行された『榑築遺跡』山陽カラーシリーズ3、昭和五十五年四月）によって知ることができる。ところで、この立石について当の近藤義郎氏は次のように述べられている。

立石はいま五個がみられるが、これがかつてのすべてであるかどうかは、頂部全面の調査によって据え痕の有無を検討するまでは明言できない。総社市新本立坂の一墳丘墓上にある立石は一個であるが、同じ性質のものであるかもしれない。いまその石の面には文字が刻まれ、もと立っていたものが倒れたので起こし祀ったとある。幾星霜を経て再利用されたこのような立石は、ほかにもあったのかも知れない。またこの風習が、前方後円墳にひきつがれたかどうかは、大阪府の松岳山古墳や奈良県の日葉酢媛陵古墳の頂部にみられる立石の評価とかかわって今後の課題となろう。（傍点筆者）

奈良市山陵町に所在する日葉酢媛陵と伝える古墳に立石のあることは古くから知られているが、現実に見られないため、それがどのような形状のものかを知ることのできないのは残念である。近藤義郎氏の触れられている岡山県総社市の例を加えて、こうした墳丘上に立石の存在する



第4図 松岳山古墳の立石（『好古日録』より）



第5図 松岳山古墳の立石（『大阪府文化財調査報告』第5輯より）

例は案外多いかも知れない。榑築遺跡のように、墳丘が築造された時に少くとも五基の立石が設けられたというのは数少ないかも知れないが、同様な例は他にも存在するかも知れないのである。完全な形の碑ではなく、文字を刻していないで自然石が立てられている場合には、見のがしていることもあるうし、本来は立てられていたが、倒れていたり、後世に石自身が動かされていたりすれば、気のつかないまま今日に及んでいるということもあり得るのである。そうした観点からいえば、従来古墳としてみとめられて来た墳丘、あるいは最近全国の各地で相次いで見つかっている方形周溝墓・方形台状墓さらに墳丘墓などとよばれているものにも、こうした立石の存在を念頭において見直して見る必要も生じて来る。それが立石でなく木の立てられていたことも予測することができようであろう。

いずれにしても、中国において碑なり碣なりとよばれたものが、廟門に立てられたものと墓上に立てられたものとのちがいはあるが墳墓の営造や墳丘の設備とかかわりがあるということである。従ってそれは墓制の一つとしてもとらえなければならぬということにもなる。

榑築遺跡の墳丘墓の年代をどの時期にするかは今後議論をよぶことであろうが、それを弥生時代の終末か古墳時代のはじめとするか、そのどちらであつても大陸文化の波及、影響のあつたことは否めない事実であろう。弥生文化そのものが、大陸文化の強い影響のもとに生み出された文化であつたことは、さまざまな遺物によって裏付けられているが、榑築遺跡の主体部が木棺であること、さらにその木棺の外がわに木槨のあつたことが推測されている。とすれば、その源流は楽浪の木槨墓ひいては漢代の墳墓に求められるであろう。畿内にしても北九州にしても、多くの場合、弥生時代の墳墓の主体部が木棺であることは今日では常識となつてゐる。兵庫県田能遺跡、大阪府瓜生堂遺跡・同鬼虎川遺跡・同勝部遺跡と、相次いで木棺が発見された当時、それと係わりのあつた者が、その源流を漢代の墳墓に求めたいということを指摘したことがあつた。⁽⁴⁾それと同様に、碑あるいは碣とまでは行かなくても、“墳丘上に石を立てる”という中国ではじまつた葬送儀礼ないし習俗の一つが、意外に早く日本に伝わつていたということも考えられるのである。さらに、この考えをおし進めて見ると、古くから注意に上り問題とされて来た松岳山古墳（斎藤 忠博士は美山古墳と呼称されている。註9参照）の立石も同じ観点からとらえることができるのであり、二つの石に、本来の碑碣のなごりをとどめる孔（中国でいう穿）のあけられていることも素直に解釈することができるであろう。

中国あるいは朝鮮半島を通じての造碑の流れは、大化の改新を契機として採用された律令制度の下に、改めて、その模範とした隋・唐代の制度・文物が、同様にその文化圏にあつた朝鮮半島の三国（高句麗・百濟・新羅）の分も合わせて伝わつたが、以下それについて概観して見よう。

碑碣の源流とその伝播

まずこれを文献の上で見ると、周知のことではあるが、『令義解』巻九、喪葬令に、

凡墓皆立碑。謂碑者。刻石記具官姓名之墓。銘文也。

とある規定に注意しなければならない。すなわち、令において「凡そ墓には皆碑を立てよ」とある。「謂わく、碑は石を刻み文を銘する也」の字句は義解の注釈であるが、墓上に碑を立てることが律令制度の下において明文文化され、制度化されていたのである。そして、その碑には「具に官・姓名の墓と記せ」ということも付記されている。

令の規定が当時、実際にどのように行なわれていたのか、ということについては遺物の上から考察しなければならないが、その前にもう一つ文献をあげておこう。

『日本書紀』天智天皇八年（六六九）十月の条には、

辛酉。藤原内大臣薨。

日本世記曰。内大臣春秋五十薨于私第。廼殯於山南。天何不淑。不慈遺耆。嗚呼哀哉。碑曰。春秋五十有六而薨。

の記事がのせられている。藤原内大臣すなわち大織冠鎌足の薨去を伝えているが、「日本世記に曰く」とある注の中に「碑に曰く」という文言のあることに注意しなければならない。これについては、藤原氏の『家傳』の鎌足伝に、「天智天皇八年十月に内臣中臣鎌足は内大臣に任じられ、藤原の姓をたまわった翌日に近江の私宅で没し、天智天皇 年九月に山階寺（藤原氏の氏寺、現在の京都市山科の地にあった）で葬礼の行なわれたこと、百濟人で文人の沙叱昭明はその遺徳をたたえるために碑文をつくった。そしてその碑文は別巻にある」という意味の文章がのせられている。その原文は次の通りである。

即位（天智天皇）二年冬十月稍纏_レ沈痾。遂至_二大漸_一。……十六日辛酉薨_二于淡海之第_一。時年五十有六。上哭之甚慟。廢朝五日。……粵以_二庚午閏九月六日_一葬_二於山階精舍_一。勅_二王公卿士_一悉會_二葬所_一。使_二大錦下紀大人臣告_一送_レ終之辭。致_レ贈賻之禮。……百濟人小紫沙叱昭明。才思穎拔。文章冠_レ世。傷_二令名下_一傳賢德空沒。仍製_二碑文_一。今在_二別卷_一。有_二二子貞惠史_一。俱別有_レ傳。（傍点筆者）

鎌足を葬った墓の所在は明らかでないが、これらの記録によって、鎌足の墓に碑が建てられたことがわかる。とすれば、この墓碑は、令の規定に従って建てられた日本最古の墓碑ということになるが、現物はもちろん現存していない。

碑を建てることについての記録もあり、碑そのものが現存している唯一の例として、元明天皇陵碑をあげることができる。

『續日本紀』元正天皇の養老五年（七二二）十月の条には、

丁亥（十三日）、太上天皇（元明天皇）召入右大臣從二位長屋王、參議從二位藤原朝臣房前、詔曰、朕聞、萬物之生、靡不有死、此則天地之理、奚可哀悲、厚葬破業、重服傷生、朕基不取、朕崩之後、宜於大和國添上郡藏寶山北雅良岑造竈火葬、莫改他處、諡號稱其國其郡朝廷馭宇天皇流傳後世（以下略）

とあり、つづいて、

庚寅（十六日）、太上天皇又詔、喪事所須、一事以上、准依前勅、勿致闕失、其輜車靈駕之具、不得刻鏤金玉、繪飭丹青素薄是用、卑謙是用、卑謙是順、仍丘體無鑿、就山作竈、艾棘開場、即為喪處、又其地者、皆殖常葉之樹、即立刻字之碑（傍点筆者）

と記されているのである。太上天皇崩御のことは統紀に記事はないが、自らの喪葬についてこれほどに厳しい遺詔をのこされた理由はわからない。奈良時代における墳墓の营造、火葬のこと、さらに薄葬令との関連で引用される記事であり、文献であるが、当面の課題としては、末尾に「立刻字之碑」とあることである。

この碑は現存している。江戸時代のいつのころにか、奈良市奈良坂町にある奈保山陵の墳丘の南側がくずれ、そこから発見されたということであり、藤貞幹の『好古小録』をはじめ、奈良の地誌にも記されている。その間の事情およびこの碑については、福山敏男博士のくわしい論考がある。第6図に示したのは、『好古小録』にのせられている図で、「高三尺、濶二尺餘、厚一尺」とあるから、大体の大きさと形を知ることができる。上部に縦八個、横七個の方格の目盛をつくり、四十五字から成る次の銘文が刻まれているということである。

大倭國添上郡平城

之宮馭宇八洲

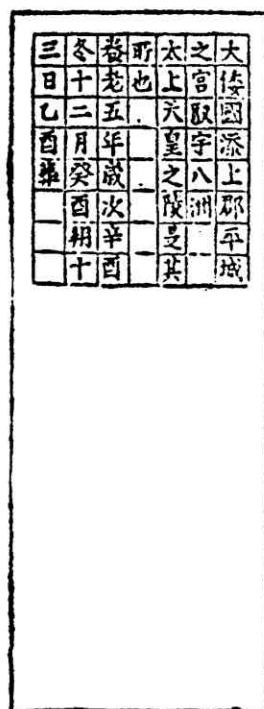
太上天皇之陵是其

所也

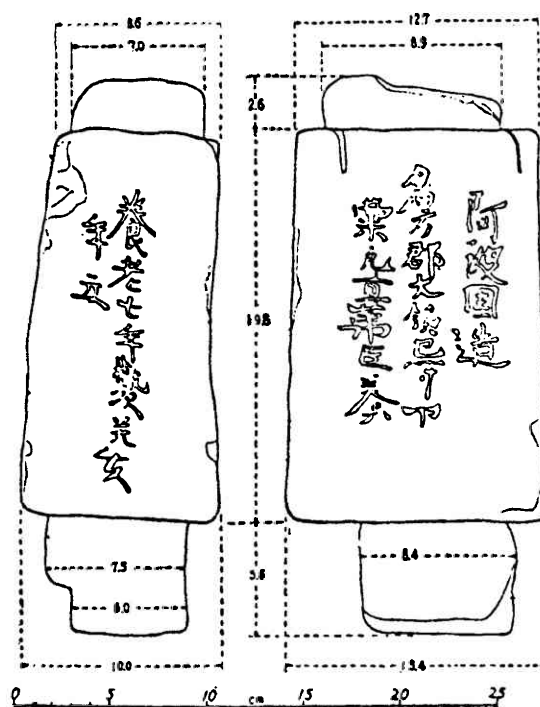
養老五年歲次辛酉

碑碣の源流とその伝播

元明天皇御陵碑 二尺六寸高 一尺二寸



第6図 元明天皇御陵碑（『好古小録』より）



第7図 阿波国造碑（『新版考古学講座』7より）

冬十二月癸酉朔十

三日乙酉葬

墓碑とはいってもかかんたんなもので、墓標若しくは墓誌でもいうべきものである。方格の目盛をつくって碑文を刻した例は、中国の古碑には多くの例があるが、現存する日本の古碑にはその例は少ない。それよりもこの碑の原形は、ごばん目の区画が方形に近いことから見て、碑よりもむしろ中国の墓誌に源流をたどることができるように思うのである。

もう一つ。藤澤一夫氏が令の規定にあてはまる碑としてとり上げられたものに阿波国造碑がある。それによると、徳島県名西郡石井町字石井の中王子神社にご神体としてまつられているということで、最初にこれに着目されたのは田岡香逸氏であった。最近畏友水野正好氏も改めて調査をされた由である。これは石ではなく、焼成温度はごく低い土製のもので、いわば埴造の碑であり、上下に枘が設けられている。その大きさ

は枘をのぞいて長さが一九・八寸、正の幅が上部で一二・七寸、下部で一三・四寸、側面上部で幅八・六寸、下部で一〇寸という小さいものである(第7図)。原形を復原して見ると、下に基礎があり、現存の部分を軸部とし、上に屋根をのせた形となり、大小の差はあるが、後述する那須国造碑や多胡碑と同じようなものが考えられる。

正面には第一行四字、第二行八字、第三行六字からなる官姓名を、向かって右側面第一行八字、第二行二字の造立紀年をへら書きし、その後焼成されたものである。その文面は、

(正面) 阿波国造

名方郡大領忌寸部

栗凡直弟臣墓

(側面)

養老七年歲次癸亥

年立

と解読されている。また藤澤一夫氏は、

この墓碑は、令に規定された最も典型的な墓碑と認められるものであり、このような軟質埴材が用いられた場合、廟屋がなければやく消滅していたはずである。したがって中王子神社々殿がその後身であるとすれば、社殿の直下にあるいはその背後などはその墳墓ということになるかと思われる。

と記されている。

このあたりで、どうしても触れなければならないものとして、関東地方に所在する那須国造碑と、いわゆる上野三碑がある。古くから著名なものであり、くわしいことは省略するが、このうち多胡碑は、和銅四年(七一)三月九日、上野国に多胡郡が設けられたことを記念する建郡碑で、他の三基とは造立の趣旨が異なるが、那須国造碑と上野三碑のうちの山ノ上碑と金井沢碑が、それぞれ墓碑として造立されたものであることに注意しなければならない。中でも群馬県高崎市に所在する山ノ上碑は、碑の建っているところのすぐ横に横穴式石室を内部構造とする円墳が存在し、この古墳の被葬者が碑に記されている長利僧の母であると考えられること⁽¹⁴⁾。また、那須国造碑も、これをご神体としてまつている笠石神社のあるところが、まわりよりも一段高く、それ自身が古墳であると考えられていること⁽¹⁵⁾。等によって明らかに墳墓の明示であり、葬った人の顕彰を目的として造立した本来の碑の意味を伝えているのである。

ところで、多胡碑をふくめて、中央には数少ない奈良時代造立の古碑が東国に存在するのは何故だろうか。すでに先学が指摘されていること

碑碣の源流とその伝播

であるが、東国の開拓に当たって入植し、定住した渡来系氏族とくに新羅系の人びとによってもたらされた母国における造碑の風習のあらわれと見るのが妥当であるように思われる。那須国造碑に記された那須直は渡来系氏族ではないが、那須郡は下野国の中心であり、やはり数多くの渡来系氏族の居住していたところであるから、その影響下にあつての所産と考えられるのである。

那須国造碑と多胡碑は、どちらも碑身が方形につくられ、その上に笠をのせており、後代の笠塔婆の形をしている。こうした方形の碑身に笠をのせる碑形の源流は中国の唐代にあり、その遺例として西安市の郊外乾県にある唐の高宗と則天武后を葬った乾陵の墓道に建てられている「乾陵述聖碑」(第8図)や、西安碑林の正面、碑亭の中央にある太宗の書で著名な「石臺孝經碑」があげられる。それらとくらべるとこちらははるかに小規模なものであるが、こうした唐代の碑が朝鮮半島にも伝えられ、新羅系の渡来氏族によって古代の日本に伝播したものとして、その系譜をたどることができるのではないだろうか。これに対して山ノ上碑・金井沢碑は自然石を利用した碣の流れを汲むものである。

新羅といえば、韓国慶州邑に所在する武烈王陵には、陵の前方、向かって右側にみごとな亀趺と螭首がのこっている。碑身は失われているが、もとは立派な陵碑が建てられていたことがわかる。また聖徳王陵にも亀趺があり、新羅の王陵には中国の制にならって陵碑を建てる場合のあったことが知られるのである。日本においても陵碑の制は採用されたのであるが、亀趺と螭首をそなえた碑の形式は伝わらなかった。古代日



第8図 乾陵述聖碑

本の碑にはその遺例が見られないのである。余談ではあるが、韓国での見聞をふりかえって見ると、国立慶州博物館の野外には、多数の石造遺物が展示されているが、その中でいくつかの大小さまざまな亀趺を実見した。また、国立公州博物館・同扶余博物館でも実見したから、三国時代の新羅から統一新羅時代にかけて、さらに百済においても亀趺をもつ碑の形式が盛行していたのである。

奈良時代から平安時代に造立された日本古代の碑は、文献に記されているもの、現存するものをふくめて二十数例がある。数田・福山両氏の著作に収載されているものを表にまとめて見たので掲げておく。日本の古碑について

は、まだ述べたいことは多いが、も早紙数も尽きたので別稿にゆずることにしたい。

日本古碑の分類（＊は現存するもの）

福山敏男博士による（『新版考古学講座』7）

種別	遺	例	所在地
墓	那須国造碑 ＊ 山上碑（山名郡碑） ＊ 采女氏墓所碑（磐城碑） ＊ 元明天皇陵碑 ＊ 金井沢碑（結知識碑） ＊		栃馬 群馬 大坂 奈良 群馬
温湯	伊予道後温湯碑		愛媛
架橋	宇治橋造橋碑 ＊		京都
建郡	多胡碑 ＊		群馬
築城	多賀城碑 ＊		宮城
造池	益田池碑 万濃池後碑		奈良 香川
歌	弘足石歌碑 ＊		奈良

碑碣の源流とその伝播

造寺碑	沙門勝道歴山水堂玄珠碑 大安寺碑 大仏殿碑	栃馬 奈良 奈良
造像碑	南天竺婆羅門僧正碑 鎮国寺碑	福岡
経碑	涅槃経碑（宇智川磨崖） ＊ 如法経碑（浄水寺跡） ＊ 随求陀羅尼碑（竹葉山觀音堂） ＊ 如法経碑（明星輪寺） ＊ 如法経碑（稻積山） ＊ 如法経所碑（立石寺） ＊	奈良 熊本 福岡 愛知 大分 山形
寺産碑	浄水寺南大門碑 ＊ 浄水寺碑 ＊	熊本 熊本

碑碣の源流とその伝播

故薮田嘉一郎氏による（『石刻』）			
種別	遺	例	所在地
墓 碑	山ノ上碑 那須国造碑		群馬
神 道 碑	元明天皇陵碑		奈良
盟 碑	采女氏瑩域碑 金井沢知識結碑 浄水寺跡南大門碑		大阪 群馬 熊本
界 至 碑	浄水寺跡碑 多賀城碑		熊本 宮城
公 牘 費	多胡碑		群馬
述 功 碑	宇治橋断碑 沙門勝道歴山水瑩玄珠碑 大安寺碑		京都 栃木 奈良

塔 銘 碑	大仏殿碑 益田池碑 万農池後碑 南天竺婆羅門僧正碑	奈良 奈良 香川
詩 文 碑	湯岡側碑（道後温湯碑） 仏足石歌碑	愛媛 奈良
画 像 碑	仏足石碑 鎮国寺阿弥陀像碑	奈良 福岡
経 典 碑	阿弥陀経碑 大和宇智川涅槃経摩崖碑 竹葉山観音堂随求陀羅尼碑	福岡 奈良 福岡
如 法 経 碑	立石寺碑 明星輪寺碑 稲積山碑 浄水寺跡碑	山形 岐阜 大分 熊本

最後に、日本において中世以後、碑の造立はどのように推移して行くのかということを観してしめくりとしたい。

碑碣というものを生み出し発展させた中国にはとうてい及ばないにしても、その影響を受けて古代日本にも碑が建てられた。それらはほとんどが唐時代の碑形や制度を採用したものであったことが認められるが、平安時代の中ごろを一つの時期として碑の造立は休止するのである。その原因は、他のすべての文化がそうであったように、遣唐使の廃止に要因が求められることかも知れないが、唐文化の流入が止まったこととも

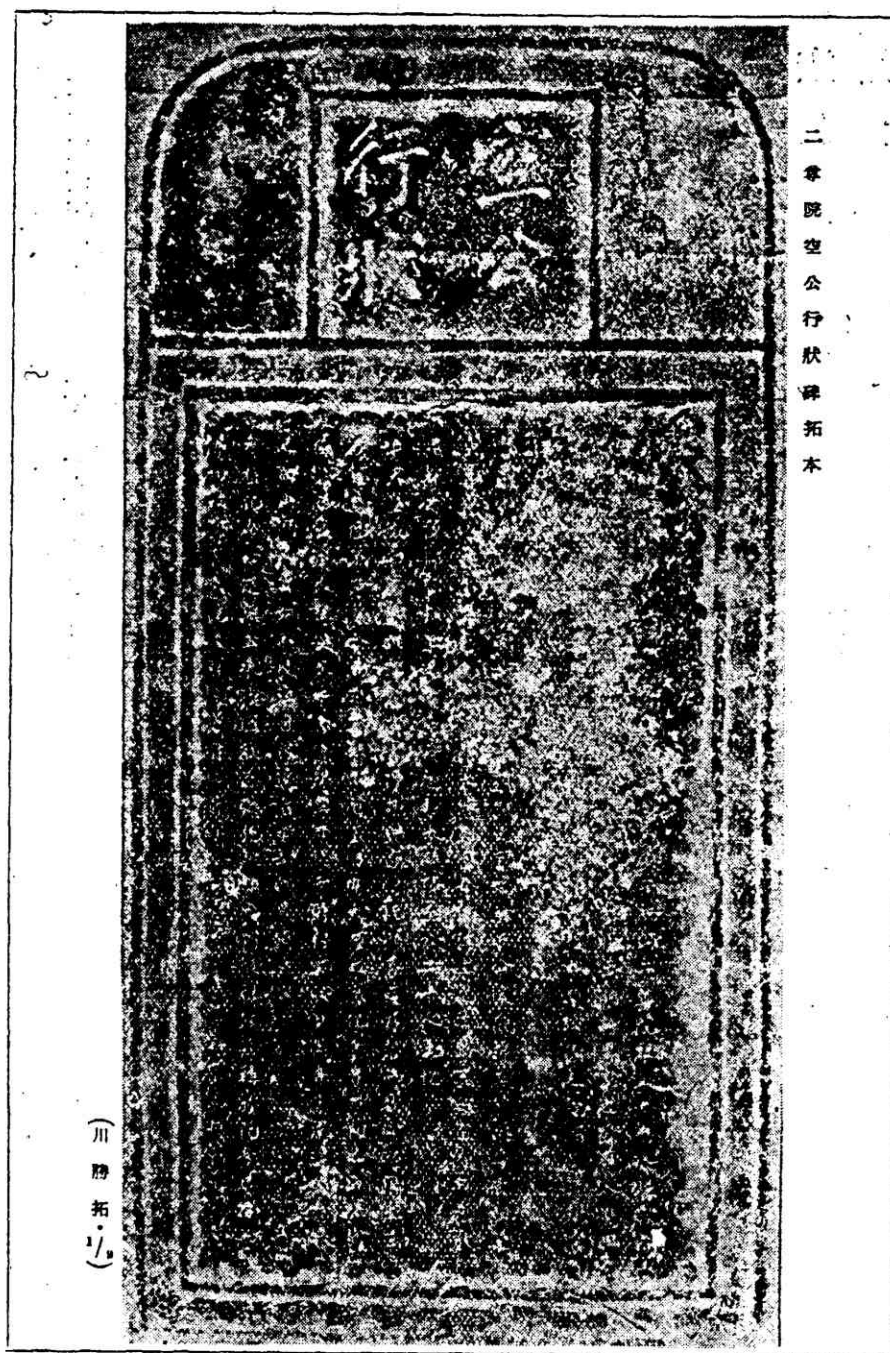
碑碣の源流とその伝播

寺之西山門□□如不及泣因彼遺旨略刻此片石銘曰

世有權化非公是誰生來穢國教益弘施死□西刹徼祥顯茲稱弥陀号畢□爲□

念佛功大聖言莫疑欲爲後學樹此豐碑
大宋國慶元府打石梁成覺刊

二尊院空公行狀碑拓本

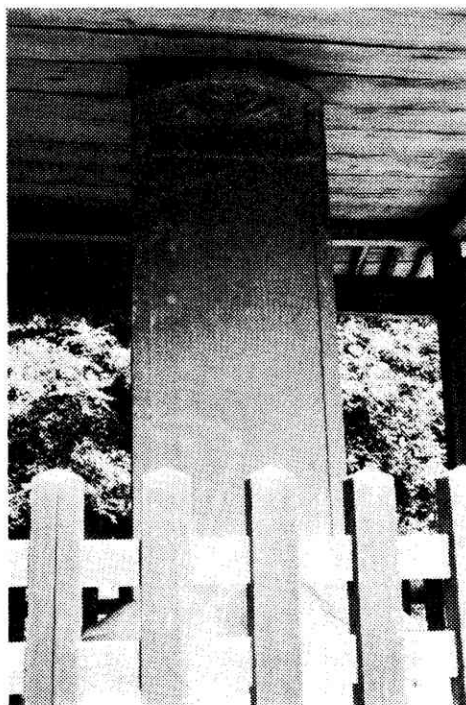


(川勝拓)

第10図 空公行狀碑拓本 (『京都古銘聚記』による)

碑文は左の通りであるが、末尾に「大宋國慶元符打石梁成覺刊」と刻まれていて、この碑が宋人の石大工によって造立されたことが知られる。しかしこれまで中国の碑を見て来た眼には、この碑はまったく中国風の碑から脱却しており、いわば国風化した碑であるといわざるを得ない。建長五年(一二五三)といえは鎌倉時代であるが、中世の数少い碑として貴重である。

国内が戦乱に明け暮れ



第11図 特賜大光普照国師塔
(黄檗山萬福寺境内所在)



第12図 思徳之碑
(三重県鈴鹿市、観音寺境内所在)

た戦国期には、碑を造立するといったことは皆無に等しかったのであろうか。さまざまな趣旨で、さまざまな形の碑が盛行するのは、近世、江戸時代を迎えてからのことである。その一つの動機として私が考えるのは、徳川家康の招聘と、その手厚い保護のもとに来日した隠元によってもたらされた黄檗宗との関係を仮説として提示して見たい。すでに鎌倉時代に入宋した栄西・道元によって禅宗はわが国に伝えられたが、仏教の一流派としての教えなり、思想は伝えられても、広い意味での物質文化が伝えられたのではなかった。それに対して黄檗宗はさまざまな中国風の文化を伴い、その総本山である宇治の萬福寺は、隠元以下六代までが明僧であったことや、「山門を出れば日本ぞ茶つみ唄」の句に象徴されているように、中国の生活・習俗がこの山門内にはみなぎっていたのである。

黄檗山萬福寺の境内、祖師堂の前には、宝永六年（一七一〇）に建てられた「特賜大光普照國師塔」と題する碑がある。特賜大光普照國師すなはちわち隠元の頌徳碑である（第11図）。碑身の高さ約三呎、幅約一呎の堂々としたもので亀趺を備えている。碑身の形状は、いくらか日本風になっているが、中国の碑制を踏襲するものと看做することができる。本山だけでなく地方の黄檗宗寺院に見られる住僧の墓碑や頌徳碑に、亀趺をもつものが多いのは、このあたりに根源があるものと思う。また江戸時代の大名級の墓碑に、中国の碑にならった立派なものが盛行するの

碑碣の源流とその伝播

は、この黄檗宗からの流れの他に、清朝の考証学が朱子学とともにわが国に流入したことがそのもっとも大きい要素であったと考えられるのである。その一例として、三重県鈴鹿市に所在する浄土宗観音寺の境内に建てられている「思徳之碑」をあげておく。これの特徴は上部が山形につくられていることであり、とりも直さず碑の原形である圭首を再現しているのである(第12図)。この碑は、碑側と碑陰に刻まれている文によると、伊勢神戸藩主第二代、本多忠永侯の事績を藩校の教官であった長野豊山が撰文したものであることが知られるが、中国の碑制ならびに碑のあり方等について精通していたことによって、こうした古式に従った碑がつくられたと見ることができるのである。

- (1) 水野清一博士「碑碣の起源」(『書道全集二、中国』漢所収、昭和四十六年二月)
- (2) 秦の始皇帝はじめて中国の国土を統一し中央集権国家を築いた。始皇帝は統治を強化するため、前後五回にわたって全国を巡視し、そこに石碑を立てて功德を刻んだ。『史記』秦始皇本紀によると、石碑は、嶧山・泰山・瑯邪・芝罘・東觀・碣石・会稽の七カ所にあったという。
- (3) 大雁塔は古都西安のシンボルであり、唐代唯一の遺構でもある。長安城和平門の南約四キロ、大慈恩寺の境内にある。六四五年、インドの旅を終えて帰国した玄奘三蔵を唐の三代高帝皇帝はこの寺に迎えた。のち玄奘は仏典を保存するために建てたのがこの大雁塔である。唐代の書家として有名な褚遂良の筆に成る二基の石碑は大雁塔南門の左右の龕の中におさめられている。
- (4) 江戸時代に現在の大阪府柏原市国分の松岳山の丘陵上から発見された銅板の墓誌である(飛鳥資料館『日本古代の墓誌銘文篇』昭和五十三年参照)。
- (5) 大阪府教育委員会『河内松岳山古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第5輯、昭和三十二年。
- (6) 藤 貞幹『好古目録』十三「碑」の中にこれを収録している。
- (7) 喜田貞吉博士「河内国分山船氏の墳墓―王辰爾墳墓の推定」(『歴史地理』第一九卷第六号、明治四十五年)。
- (8) 梅原末治博士「河内国分松岳山船氏墳墓の調査報告」(『歴史地理』第二八卷第六号、大正五年) および同博士「再び河内松岳山船氏の墳墓に就いて」(『歴史地理』第二九卷第四号、大正六年)。
- (9) 斎藤 忠博士「松岳山古墳群に関する二、三の考察」(『日本古代遺跡の研究 論考編』所収、昭和五十年)。
- (10) 木棺研究グループ(藤井稿)「弥生時代の木棺について」(『帝塚山考古学』NO1、昭和四十三年)、荻田昭次氏「弥生時代木棺の系譜」(『豊中市教育委員会編『勝部遺跡』所収、昭和四十七年)。
- (11) 藤原鎌足の葬られた墳墓は不明であるが、昭和七年、現在の大阪府茨木市安威の阿武山で発見された古墓が鎌足墓に擬せられたことがあった(梅原末治博士「摂津国三島郡阿武山古墓の調査」(『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第七輯、昭和〇〇年)。
- (12) 福山敏男博士「元明天皇陵碑」(『史迹と美術』第四一七号、昭和四十六年)。
- (13) 藤沢一夫氏「火葬墳墓の流布」(『新版考古学講座』6、有史文化(上)所収、昭和四十五年)。
- (14) 尾崎喜左雄博士「山ノ上古墳と山ノ上碑の紀年」(『横穴式古墳の研究』所収、昭和四十一年) および同博士『多胡碑』(中央公論美術出版美術文化シリーズ)

ズ、昭和四十二年）。

- (15) 斎藤 忠博士『年表でみる日本の発掘・発見史』①奈良時代～大正篇（NHKブックス、昭和五十五年七月）。
- (16) 川勝政太郎・佐々木利三氏編『京都古銘聚記』昭和十六年、および川勝政太郎先生『石造美術と京都』（昭和二十一年）。
- (17) 仲見秀雄・前川信雄氏著『新編鈴鹿市の歴史』（鈴鹿青年会議所、昭和五十年）。

五. 小 結

以上「碑碣の源流とその伝播」と題して、碑のはじまり、碑形のうつりかわり等についてこれまで知り得たことがらを書き連ねて見た。しらべて見れば見るほど、問題は多岐にわたり、短時日のうちに解決できるものではないことを痛感した。あまりにも広大であり無限の課題なのである。とくに、わが国の中世・近世の碑の遺例は、膨大な数に上るのであるが、まったく手のつけられていない分野であり、遺例の調査だけでも一生で果たし切れないであろう。しかし、その変遷の過程だけでも把握したいと思うのであるが、それは今後の課題の一つとしておきたい。日本の古碑については、奈良・平安時代のものうち、私が実見したものを基にして「古代日本における建碑とその遺例」と題した別稿を発表する予定（『舟崎正孝先生退官記念論文集』所収、大阪教育大学歴史学研究室）であるので合わせてご高覧をたまわれれば幸である。